

『ブライドと偏見』研究 —世界諸英語の時代の『高慢と偏見』—

山 口 美知代

1 はじめに

本論の目的は、インド系イギリス人グリнда・チャータ監督の映画『ブライドと偏見』(*Bride and Prejudice*)について、チャータの作品のなかでの位置づけを明らかにしたうえで、用いられている英語の特徴を分析し、また、英語教材として本映画を用いる場合の可能性を提案することである¹。本論文の分析は、Mira Max 社の DVD、*Bride and Prejudice* に基づいている。

『ブライドと偏見』は、題名からも明らかなように、ジェイン・オースティンの小説『高慢と偏見』(*Pride and Prejudice*)を下敷きにしており、映画のエンディングには Inspired by Jane Austen's *Pride and Prejudice* と示される。なお、本映画は日本では公開されておらず、また DVD も販売されていないため邦題が定まっていない。山下・岡光(2010:13)では『花嫁と偏見』と訳しており、英語との対応ではこれがわかりやすいが、本稿では『ブライドと偏見』と訳している。これは *Bride and Prejudice* が *Pride and Prejudice* を踏まえていることを音の類似が明確になるようにという意図で、2005 年の映画 *Pride and Prejudice* の邦題『ブライドと偏見』をふまえている。またオースティンの原作小説は『高慢と偏見』と記す。

以下、第2節でグリнда・チャータ監督の略歴と主要作品について紹介し、第3節で『ブライドと偏見』のあらすじを『高慢と偏見』と対比しながら述べる。第4節で『ブライドと偏見』の英語の特徴を記す。第5節では、この映画を用いて世界諸英語に関する理解を深めるための英語教育を行う方法について考える。

2 グリнда・チャータ監督—略歴とフィルモグラフィー

『ブライドと偏見』の監督グリнда・チャータは、インド系イギリス人の少女がサッカーをする映画『ベッカムに恋して』(*Bend it Like Beckham*, 2002) が代表作として知られている。

チャータは1960年ケニアのナイロビに生まれ、2歳のときにイギリスに移住して、ロンドン西部のインド人街サウスオールで育った²。パンジャブ地方出身のシーク教徒である。『ベッカム

に恋して』の主人公の父がナイロビからロンドンに移住しているのは監督の父の姿と重なる。サウスオールは『バッジ・オン・ザ・ビーチ』、『ベッカムに恋して』や『プライドと偏見』、『イツ・ア・ワンダフル・アフターライフ』などでチャータがロンドンを描くときの舞台である。また、『プライドと偏見』でバクシ家の人々が暮らすアムリッツアは、シーク教徒の聖地である。

チャータはBBC ラジオのニュース記者、ドキュメンタリー制作・監督を務めたのち、独立して映画制作を始めた。以下、主要作品を紹介する。

最初の長編映画は1993年の『バッジ・オン・ザ・ビーチ』(*Bhaji on the Beach*)で、ロカルノ国際映画祭審査員賞受賞、英国アカデミー賞英国作品賞(アレクサンダー・コルダ賞)ノミネートなど高い評価を受けた。ロンドンに住むインド系移民の女性たちがイングランド北西部の観光地ブラックプールに日帰りバスツアーに出かけた一日を描いている。ドメスティック・バイオレンスに苦しむ女性や、アフリカ系男性との恋愛を家族に打ち明けられない女性、また、若い世代の考え方に眉をひそめる年配の女性たちを描いている³。

2作目の『ワッツ・クッキング』(*What's Cooking?*)は2000年の映画で、ロサンゼルス⁴の4家族の様子を感謝祭のディナーを舞台に描いている。

2002年の『ベッカムに恋して』(*Bend it Like Beckham*)は、ロンドンのサウスオールに住むインド系イギリス人二世の少女が、両親の伝統的な価値観や考え方と衝突しながらも、サッカーや恋愛を通して、成長していく様子を描いている。これはロカルノ国際映画祭観客賞をはじめとする国際的映画賞を受賞し、英国アカデミー賞の英国作品賞にもノミネートされた。なお『ベッカムに恋して』で、主人公の父親を演じるインド人俳優アヌパム・カーは『プライドと偏見』でもバクシ家の父を演じている。

そして2004年に公開されたのが『プライドと偏見』である。この映画については第3節で詳しく扱う。

2006年の『パリ、ジュテーム』(*Paris je t'aime*)は、パリを舞台にした18の短編のオムニバス形式の映画である。そのなかでチャータはセーヌ河岸を舞台にした短編で、イスラム教徒の移民女性を描いている。

2008年の『ジョージアの日記 ゆーうつでキラキラな毎日』(*Angus, Thongs and Perfect Snogging*)は、イングランド南部ブライトンの中等学校を舞台に14歳の少女たちの学園生活、恋愛を描いたコメディである⁴。インド系イギリス人の少女は主人公を取り巻く友人のひとりとして登場するが、特に移民や多民族社会を主題にした映画ではない。

2010年の『イツ・ア・ワンダフル・アフターライフ』(*It's a Wonderful Afterlife*)は、ロンドンのインド人街サウスオールのインド系イギリス人女性を主人公にしたコメディで、娘をインド系男性と結婚させようと奔走する女性が、それがうまくいかない恨みから連続殺人を起こす様子や、その捜査に娘の幼馴染の男性が現れる様子を、スプラッター映画風のシーンも入れながら描いている。

こうした作品群のなかで『プライドと偏見』は、インド人女性、インド系女性の恋愛や結婚を

家族との関わりを置いて描いたという点で、チャータの『バッジ・オン・ザ・ビーチ』、『ベッカムに恋して』、そしてこの後の『イツ・ア・ワンダフル・アフターライフ』に主題的につながる映画である。特に、インド系でない相手との恋愛を扱っている点は『ベッカムに恋して』と共通している。また、母親が娘の結婚相手探しに奔走する点は『イツ・ア・ワンダフル・アフターライフ』と共通している。

一方で、『ブライドと偏見』にはボリウッド映画によくみられる歌と踊りで登場人物の気持ち(特に恋愛感情)を表す手法が用いられているが、チャータのほかの映画にはこうした歌と踊りの多用はない。この映画は「ジェーン・オースティンの『高慢と偏見』をインド風のミュージカルに仕立てた」⁵と評されることもあるが、ミュージカル映画というほど歌や踊りが多いわけではない。

3 『ブライドと偏見』—あらすじと『高慢と偏見』との対比

『ブライドと偏見』のあらすじをみていこう。なお、原作の小説『高慢と偏見』との対応を各段落の最後の()内に記している。

インド北部の町アムリツアに暮らすバクシ家には、4人の娘がいる。上からジャヤ、ラリータ、マヤ、ラキの4人であり、ラリータが主人公である。(バクシ家の娘たちは、それぞれ、『高慢と偏見』のベネット家のジェイン、エリザベス、メアリー、リディアにあたる。キティに相当する娘はいない。)

バクシ夫人は娘たちに結婚相手を見つけることに腐心している。特に1人か2人は海外で成功している裕福な在外インド人と結婚してほしいと言っている。持参金(dowries)を持たせることができないからというのである。(『高慢と偏見』のベネット夫人が娘たちの結婚相手探しに懸念なのは、男子しか相続権がないという19世紀初頭のイングランドの事情からである。)

ラリータたちはアムリツアで開かれた友人の結婚パーティーで、イギリスからやってきたインド系男性で法廷弁護士のバラージと彼の妹キラン、また、彼の友人のアメリカ人で国際的なホテルチェーンのオーナーの息子ウィリアム・ダーシーと出会う。バラージとダーシーはオックスフォード大学時代からの友人である。バラージとジャヤは恋に落ちる。ウィリアム・ダーシーはアングロ・サクソン系である。(バラージは『高慢と偏見』のチャールズ・ビングリー、キランはキャロライン・ビングリー、ウィリアム・ダーシーは大地主フィッツウィリアム・ダーシーに対応)

ダーシーは美しいラリータに目を奪われる。しかしラリータはダーシーが、インドの見合い結婚や、停電が多くインターネットの接続が悪いインドのホテル事情について辛辣なコメントをしたため、彼を傲慢なアメリカ人だと断じる。(『高慢と偏見』のように、ダーシーがエリザベス自身を軽んじる発言はない。)

バラージは、ダーシーが買収のために訪れるゴアのリゾートホテルに、ジャヤとラリータを招く。ラリータはプールサイドで読書をし、キランに皮肉を言われる。皆が海辺でくつろぐ夜、ラリータはギターを弾く。(ゴアの場面は『高慢と偏見』のネザフィールドにジェインとエリザベ

スが招かれるシーンに対応している。)

ゴアの海岸でラリータは、野性的なイギリス人旅行者ジョニー・ウィッカムに出会い惹かれる。ウィッカムはアングロ・サクソン系のイギリス人で、ダーシー一家がイギリスに滞在していたときに、ウィッカムの母親がダーシーの乳母を務めていた。ウィッカムはダーシーが冷たい人間であるという印象をラリータに与える。ウィッカムはインドをバックパッカーとして旅行しており、イギリスでは運河に停泊するナローボートを住まいとしてヒッピー風の暮らしをしている。(ジョージ・ウィッカムに対応。)

ジャヤとラリータがゴアからアムリツァに帰ってきた後、バクシ家をアメリカから遠縁の男性コリが訪れる。アメリカ永住権を得たインド系アメリカ人のビジネスマンであるコリはバクシ家の娘のひとりを結婚相手と考えている。バクシ家には一家で渡米する計画があったがバクシ氏がインドで暮らすことを望んだ。バクシ夫人にはそれが不満として残っている。コリはおしゃべりで、アメリカのほうがインドより優れていると考えている嫌味な人物として描かれている。ラリータは彼の求婚を断り、彼はラリータの友人チャンドラと婚約する。(コリはベネット家の遠縁で、ミスタ・ベネットの死後、家督を相続するミスタ・コリンズに対応。)

ウィッカムがバックパッカーとしてアムリツァを訪問する。ウィッカムはバクシ家の四女ラッキと親密になるが、ラリータは気が付かない。やがてウィッカムは去り、バラージやダーシーたちも2週間の滞在の予定を早めて帰国する。

コリは、ラリータの友人チャンドラと結婚することにする。そしてその結婚式に、バクシ家の母娘たちが招待される。ラリータたちはロサンゼルスでの結婚式に行く途中に、ロンドンを訪れ、ジャヤがバラージと会えるようにする。なおラリータたちの親戚はインド系移民の多く住むサウスオールに住んでいるが、同じインド系でもバラージの家は窓からウィンザー城が見える場所にあるという設定である。ロンドンのタワーブリッジ、ロンドンアイなど代表的な観光名所を写し、また、シーク教のモスクを写す⁶。(『高慢と偏見』で、ジェインがロンドンの叔母宅に泊まって、ロンドンのビングリー宅を訪れるが会えない場面に相当。)

ラリータたちはバラージの家を訪れるが在宅しているのはキランだけで、ジャヤはバラージとは会えない。失意のままロサンゼルスへ向かう一行は空港で、ロンドン出張帰りのダーシーに出会う。ダーシーはファーストクラスの自分の座席をバクシ夫人に譲り、エコノミークラスでラリータの隣に座る。ラリータはダーシーと親しく話すようになる。

コリとチャンドラの結婚式はダーシー家の所有するホテルで行われる。ダーシーはホテルオーナーである母にラリータを紹介する。ダーシーの母は、ゴアのホテルの買収をダーシーが断念したことはビジネス上の損失であったと嘆くが、ダーシーはラリータの言葉が自分の判断に影響を与えたことを皆の前で母に告げる。ダーシーの母は、ホテル買収がかなわなかった今となっては、ヨガもインド料理もアメリカで十分に味わえるのでインドに行く必要はない、と言うが、ラリータは「ピザハット(ピザのチェーン店)が近くにできたからと言ってイタリアに行くのをやめたりしないでしょ」と反論し、インドを訪れてほしいという。(『高慢と偏見』では、ダーシーの

伯母である貴族レディ・キャサリン・ド・バークが、ダーシーを娘アンの結婚相手と考えており、エリザベスを牽制する役として出てくる。『ブライドと偏見』ではダーシーの母がその役割を果たしている。)

ダーシーは「母に意見した勇敢な女性」とラリータを夕食に誘い、二人は打ち解ける。お互いの恋愛感情が歌の挿入、郊外のドライブや海辺を肩を抱いて歩く映像によって表される。

しかし、コリとチャンドラの結婚式にダーシーの母が息子の将来の妻と決めている女性が現れ、ラリータとダーシーの関係はぎこちないものとなる。さらにラリータはダーシーの妹ジョージアナから、ダーシーこそがバラージを姉のジャヤから引き離した張本人であることを聞き、彼への怒りを覚える。

ダーシーはラリータに好意を打ち明けるが、ラリータはジャヤとバラージを引き離したことを非難し、また、ダーシーが自分への恋愛感情を恥じていると指摘する。(『高慢と偏見』のダーシーの最初の告白に相当する。『高慢と偏見』ではダーシーの屋敷ペンバリーを訪れる前のシーンであるが、『ブライドと偏見』では、ラリータがダーシー家のホテルの豪華さを見てから、ダーシーへの偏見を緩めたのではないかとからかわれる場面はこの告白の前である。)

結婚式の後、ラリータたちはロンドンの親戚の家に再び寄る。そのとき四女のラキが買い物に行くと嘘をついてウィッカムに会いに行き帰ってこない。バクシ氏もアムリツァからロンドンに向かう(ウィッカムとリディアの駆け落ちシーンに相当。)

ラリータを追いかけてロンドンにやってきたダーシーは、ラリータからラキとウィッカムの事情を聴いて、ウィッカムがかつて妹ジョージアナを妊娠させたこと、彼女と財産目当てで結婚しようとしたことを告げる。(『高慢と偏見』ではウィッカムがジョージアナを誘惑し、ダーシーが救い出したことを、ダーシーが手紙でエリザベスに告白する。)

ダーシーはテムズ河畔サウスバンクでラキと一緒にいるウィッカムを見つける。ナショナル・フィルム・シアター映画館で殴り合いのけんかをしてラキから手を引かせる。(『高慢と偏見』ではウィッカムと駆け落ちしたリディアの名誉を守るためにダーシーが二人を正式に結婚させるよう尽力する。『ブライドと偏見』では、ウィッカムとラキは別れることになる。)

サウスオールのパクシ家の親戚の家にダーシーとラリータがラキを連れて戻ると、そこには、バラージがジャヤと結婚を決めたという吉報が待っていた。バクシ夫人は、これでラリータにもだれかインド系男性の結婚相手が見つかったらいいのと言い、ラリータとダーシーは顔を見合わせる。

最後の場面は再びアムリツァのパクシ家で、ジャヤとバラージの結婚式である。ダーシーはバクシ氏に目で了解を求めラリータに寄り添う。

4 『ブライドと偏見』の英語

『ブライドと偏見』が『高慢と偏見』のインド的翻案であり、21世紀のグローバリゼーション

を描いている。原作の『高慢と偏見』は、19世紀イギリスのミドルクラスを描いた小説で、従来の映像的表象では典型的にイギリス標準英語（容認発音、RP）と結び付けられていた。歴史的に『プライドと偏見』が大きく影響を受けていると考えられる1995年のBBC放送のドラマシリーズ *Pride and Prejudice* がその典型的な例である。ベネット家やダーシーたちがジェントルマン階層であることが、言語的には容認発音によって示されていた。

一方で、『プライドと偏見』では、英語の特徴として（1）英語がインド国内および在外インド人の共通語として用いられている点、および、（2）世界諸英語の時代を反映して、インド英語、アメリカ英語、イギリス英語など各変種の音声的特徴を備えた英語が用いられている点、があげられる。順にみていこう。

第一に、英語がインド国内および在外インド人の共通語として用いられている点について。『プライドと偏見』の主要登場人物はダーシーとウィッカム以外はインド人、および他国に移住したインド系の人々である。インドのアムリツァに住むバクシ家の人々（夫妻と4人の娘たち）、ラリータの友人のチャンドラと母、在外インド人でロンドンに住むバラージ兄妹、アメリカに住むコリが英語でコミュニケーションをとっている。

もちろんこれは、第一義的にはこの映画が英語圏の観客に向けて作られているからであり、実際の言語使用状況をそのまま正確に反映しているものではない。あくまでも映画のなかの言語である。

アムリツァのミドルクラスの家、バクシ家で家族間の会話がすべて英語であることがどれほどリアリスティックであるか、実際の同じような階層の家での言語使用を反映しているかについては、社会言語学的な調査が必要であり、本論の射程を超える。ここでは、外的要因からの推測にとどめざるを得ない。まず、インドの憲法準公用語が英語であること、経済的に余裕のあるミドルクラス以上の階層では初等教育またはそれ以前から英語での教育を受けさせている家庭が多いこと⁷、などから、バクシ家の人々が英語でコミュニケーションをとる能力がきわめて高いであろうことは想像できる。

一方でこの映画のなかではほかの言語（パンジャブ語やヒンディー語）へのコードスイッチングも少ない。家族間ではコードスイッチングは全くなく、パーティの場面で隣人へのあいさつにパンジャブ語が用いられるくらいである。これはたとえば同じような階層のデリーに住むミドルクラスの家族の結婚を描いたミラ・ナーイル監督の『モンスーン・ウェディング』における英語の使用、英語とヒンディー語との頻繁なコードスイッチングの様子とは異なる⁸。

しかしながら、国内国外のインド人が英語でコミュニケーションをはかるといふこの映画の言語使用設定が完全に不自然なものとは受け止められない背景が、21世紀の英語使用状況のなかにあることもまた事実である。

次に、世界諸英語の時代を反映して、インド英語、アメリカ英語、イギリス英語など各変種の音声的特徴を備えた英語が用いられている点について考える。

バクシ家の人々およびアメリカに住む在外インド人のコリ氏は、インド英語の音声特徴を備え

た英語を話している。特にインド英語の音声特徴がはっきりと表れているのが、バクシ夫妻とマヤとラキである（もっともマヤの台詞は多くない）。一方、主人公のラリータやラリータと仲の良い姉のジャヤは、両親や妹たちに比べるとインド英語の音声特徴（特にイントネーションや子音）の少ない英語を話している⁹。

アメリカに住むコリ氏が音声特徴のはっきりしたインド英語を話す一方で、バラージがイギリス英語を話しているのは、示唆的である。コリ氏はバクシ家の遠縁にあたるアメリカで成功した在外インド人で、『高慢と偏見』のコリンズ氏に相当する。やや尊大で滑稽な人物として描かれているが、親しみを持てる喜劇的な人物でもある¹⁰。こうした人物造形に、彼の話す英語も貢献していると考えられる。

ダーシーがアメリカの富豪であり、アメリカ英語を話すことも特徴的である。『ブライドと偏見』の構想においてダーシーが、インドの旧宗主国イギリスの富豪ではなく、21世紀世界の経済的、軍事的覇者であるアメリカの富豪であると設定されたことは、この映画の今日性を象徴している。ここでダーシーの話す英語は、比較的イギリス英語と近いアメリカ東海岸の英語ではなく、典型的なアメリカ英語として認識されることの多い、中西部標準英語（General American）である。

一方で、『ブライドと偏見』において、イギリス英語話者はインド系イギリス人バラージ兄妹と悪役のウィッカムであることも、特徴的である。前述のように1995年のBBCのドラマ『高慢と偏見』や、2005年のハリウッド映画『ブライドと偏見』などでは、イギリス標準英語 RP が用いられ、特に大地主ダーシーや伯母のキャサリン・ド・バーグ夫人などは高い社会階級を連想させる話し方（有徴の RP）をしているのに対照的である。

バラージがイギリス英語を話すことは、バラージという登場人物が、在外インド人であるという点においてバクシ夫人が求める条件に合いつつ、一方で、バクシ夫人のあこがれる外国（イギリスやアメリカ）に根差した存在であることを強く印象付けることにもなる。バラージが人種的にはインド系でありながらも、ロンドンの住まいはウィンザー城が窓から見える一戸建てで、バクシ家の親戚のようにインド人街サウスオールではない。こうした伝統的なイギリスらしさをわかりやすく身に着けている人物造形を、彼のイギリス英語は補強するものであろう。

最後に、冒頭のシーンを取り上げて『ブライドと偏見』の英語の特徴を具体的に見てみよう。バラージやダーシーがアムリッツアの空港から、町の中心部に向く車は渋滞に巻き込まれる。信号のない道で車はクラクションを鳴らし、自転車も車道を大挙して走り、通りを牛も歩いている。ダーシーはこうした光景に驚きを発する。“What do you mean it's a little bit like New York? ... Jesus Balraj, where the hell you brought me?” ここでは“little”の /t/ が有声音化し、York の母音は /r/ が発音されているなど、アメリカ英語の特徴の現れた話し方で、このスーツを着た男がアメリカからやってきたのだということを強く印象付ける。

その後場面は郊外のバクシ家の家（門柱に BAKSHI VILLA と書いてある）に移る。庭のある平屋の一戸建てで、白い石造りの壁が、イングランドの小さなカントリーハウスのたたずまいを連想させる。屋内では、バクシ家の女性たちが身づくろいをしている。“Hurry up silly girls.

We must make sure Jaya meets this Mr. Balraj from London before anyone else.”ここでは We の子音 /w/ が有声化しており、before の最後に /r/ が強く発音されている。また、全体的に強勢のある音節が多く、イントネーションも特徴的である。

そしてこうした母親を冷ややかにみているのが主人公のラリータである。“All mothers think that any single guy with big bucks must be shopping for a wife.”というラリータの台詞は、『高慢と偏見』のよく知られた冒頭の一文 “It is a truth universally acknowledged, that a single man in possession of a good fortune must be in want of a wife.”（財産があって独身の男というものは妻を探しているに違いない、というのは一般に認められた真実である）を、口語的な表現（guy, bucks, shopping for a wife）を用いており、また、オースティンの原文では敢えて a truth universally acknowledged というようにユーモアが込められていたところが、All mothers think となってより直接的になっている。

この映画ではインド英語の特徴は主として音声に表れているが、文法的特徴としては、文末に no? をつける付加疑問の使用がみられる。パーティーでバクシ夫人と隣人がバラージについて噂している台詞 “His sister is looking so lovely. So fair, no?” や、冒頭の友人の結婚式後のパーティーでラリータの友人チャンドラがジャヤとバラージを見ながら “They look sizzling, no?” などである。

5 『ブライドと偏見』を用いた世界諸英語への理解を深める英語教育

『ブライドと偏見』を題材にして、世界の諸英語への理解を深める英語教育を行う際に、どのようなアプローチが考えられるだろうか。

ひとつは、この映画がイギリスの19世紀の小説『高慢と偏見』の21世紀的翻案であることを、『高慢と偏見』との対比から考えることであろう。その際には、チャータ監督が参照したのは小説テキストであることを念頭におき、小説との対比を考えることが大事である。本論第3節で略述したようなプロットにおける違いを、原作を参照しながら考えていく。

一方で、『高慢と偏見』は何度も映像化されている。1995年のBBCドラマは『ブライドと偏見』を見る英語圏の観客にとって最もなじみのある近年の映像化のひとつであろう。また、製作や公開は『ブライドと偏見』よりも後になるが2005年の『ブライドと偏見』は『高慢と偏見』の映画としては最も新しい。こうした作品を鑑賞し、比較すること、特に、本論第4節で述べたような英語の違いに着目しながら比較することで、世界諸英語の特徴、とくにインド英語の特徴を学ぶことができる。『高慢と偏見』の翻案であるので、プロットがわかりやすい。さらに、インドのアムリツァとならんで、ロンドン、ロサンゼルスも舞台になっており、インドの社会や文化についての知識が少なく、どちらかという英米の文化により慣れ親しんでいる日本の英語学習者にとっても、内容を理解するのが難しくないと思われる。

また『高慢と偏見』は小説の続編創作や、翻案、映像化など多い。『ブライドと偏見』を、『高

『高慢と偏見』の翻案作品（小説、映画）のなかのひとつとしてどう位置付けるか、そのときに、英語の特徴がどのような機能を果たしているかを考えることもできるだろう。

一方、同じようにインドのミドルクラスの華やかな結婚式を扱ったミラ・ナーイル監督の映画『モンスーン・ウェディング』と比較して、英語の使われ方、コードスイッチングの有無、在外インド人の描かれ方などを考えることもできる。

註

- 1 本稿は科学研究費助成を受けた基盤研究（C）「世界諸英語に関する理解を深めるための映画英語教育」（研究課題番号：25370641、研究代表者山口美知代）による研究成果の一部である。
- 2 グリンダ・チャードの略歴については山下・岡光（2010）参照。
- 3 Bhaji はカレーの一種。またウルドゥー語の年上の女性に対する敬称 Baaji ともかけている。
- 4 原作小説は Louise Rennison のティーン向け小説 *Angus, Thongs and Full-Frontal Snogging* と *It's OK, I'm Wearing Really Big Knickers*. 映画原題の Angus は主人公の猫の名前、thongs は主人公のライバルがはいている下着、perfect snogging は主人公が練習している「完璧なキス」。
- 5 『パリ・ジュテーム』DVD パンフレット。
- 6 チャードはDVDの監督コメントリーでこの場面についてシーク教のモスクが自分にとってロンドンを撮る際の大事な場所であることに言及している。
- 7 榎木蘭 (2012) p.9。
- 8 山口 (2013) p.142。
- 9 ラリータを演じるアイシュワリヤー・ラーイはインド南部カルナータカ出身のモデルで1994年にミスワールドに選ばれたのち女優としても活躍することになった。
- 10 ただし、コリと結婚したラリータの友人チャンドラの口から語られるコリは、『高慢と偏見』のコリンズよりも好感のもてる人物として描かれており、最終的にはラリータのコリに対する見方も（そしてひいては観客がコリを見る見方も）、エリザベスがコリンズを見るものよりも好意的である。

参考文献

- 榎木蘭鉄也 (2012) 『インド英語のリスニング』 東京：研究社
- 山口美知代 (編) (2013) 『世界の英語で学ぶ映画』 東京：松柏社
- 山下博司・岡光信子 (2010) 『アジアのハリウッドグローバリゼーションとインド映画』 東京堂：東京堂出版
- Austen, Jane (1988) *Pride and Prejudice*. Ed. By R. W. Chapman. Oxford: Oxford University Press.
- Papamichael Stella (2004) "Bride & Prejudice (2004)" Retrieved 18 Sept.2013 from <www.bbc.co.uk/film/2004/09/16/bride_and_prejudice_2004_review.shtml>

Moodley, Subeshini (2011) *Construction of Indian Women in the Films of Mira Nair and Deepa Mehta: Towards a Postcolonial feminist Film Practice*. Saarbrücken: Lambert Academic Publishing.

Mahur, S. (May 2007) "From British "Pride" to Indian "Bride" : Mapping the Contours of a Globalised (Post?)Colonialism," *M/C Journal*, 10(2). Retrieved 18 Sep. 2013 from < <http://journal.media-culture.org.au/0705/06-mathur.php> >

(2013 年 10 月 1 日受理)

(やまぐち みちよ 文学部欧米言語文化学科准教授)